夏季特集

News Letter

架け橋

住み慣れた地域でいのちをつなぐ

発行元:
公益社団法人京都保健会
京都協立病院
あやべ協立診療所
ふくちやま協立診療所
まいづる協立診療所
たんご協立診療所

Aug. 2016/Vol.1 No.1

「地域医療の魅力が満載」

西澤寛貴　1年目専攻医

専攻医1年目の西澤と申します。私は2014年に滋賀医科大学を卒業し、京都民医連中央病院で初期研修を終了、2016年4月から家庭医療の後期研修を京都協立病院で開始しました。

家庭医を目指そうと思ったのは医学部3年のときに学内で開催された家庭医療の勉強会に参加したのがきっかけでした。それまでは小児科に興味がありましたが、地域で子どもからお年寄りまで、どんな人でもまずは自分がみましょうという家庭医の姿勢は私の思い描く医師像にぴったりでした。そのとき、家庭医療の現場をみたいと思って紹介してもらったのが京都協立病院でした。

協立病院では、どの職員もお互い顔見知りで気軽に声を掛け合える関係で非常に魅力的でした。職員食堂もおいしく、「将来はこんな病院で働きたい」と思いました。

実際に協立病院で働いてみて感じたのは、初期研修をした京都市内とは違い、京都北部という地域自体が医師不足・専門医不足だということです。すぐに専門医に相談できたり転院できたりする京都市内とは違い、自分で悩みながら調べながら、相談しながら、自分の限界を知りながら診療するという家庭医・総合診療医を育てる環境としては最適だと感じています。

医師不足で当院も大変な中、指導医・上級医の先生方が熱心に指導してくださり、充実した研修をしています。

99床という小病院ですが、地域にはなくてはならない病院だということを患者さんや地域の方々と関わる中でひしひしと感じています。

空いている土日はきちんと休んだり、半日休みを取ってたまにはゆっくりしたり、空いた時間に退院した患者さんの家に訪問看護の際に同行したり、やりたいことは自由にやらせてもらっています。

是非多くの方に協立病院の魅力を感じていただきたいです。

西澤医師の誕生日　Birthdayケーキで誕生会
小林医師・川崎医師と一緒に

● 「子どもからお年寄りまで、かかりやすく何でも相談できる病院」

院長　門 祐輔
・日本リハビリテーション学会専門医
・日本神経学会神経内科専門医・指導医
・日本内科学会認定総合内科専門医

これが本院のめざす医療です。

一方で医療機関がそれぞれの得意分野を生かして連携していく時代でもあります。まずはどんな方でも受け入れて診断・治療を行い、必要時は連携をしている医療機関へ適切に紹介します。

これからは「地域包括ケア」の時代。綾部市は高齢化率が35%を超えていますが、さらに高齢化が進む中、住み慣れた場所で医療・介護がしっかりと受けられる地域づくりを進めています。

入院では、積極的なリハビリを進める「回復期リハ病棟」、在宅を支える「地域包括ケア病床」に特に力を入れています。「回復期リハ病棟」では、中丹医療圏を超えて患者の受け入れを行い、職場復帰や在宅生活に戻られるように努めています。地域の開業医の先生方と一緒に外来や訪問診療に取り組み、訪問看護などと連携して在宅生活を支え、状態が悪くなった方の入院治療を「一般病床」「地域包括ケア病床」で積極的に行っています。

医師・看護師・リハ職種をはじめ教育を重視し、ともに学び成長できる病院、「健康友の会」や地域の方々と一緒に健康づくり、いい制度づくりができる病院として今後とも地域貢献をしていきたいと思います。

・学会発表してきました！

京都協立病院 副院長　玉木千里
・日本内科学会認定総合内科専門医
・日本プライマリ・ケア連合学会 指導医

副院長の玉木と申します。今年の6月に2演題の学会発表をしたので報告します。

私は「総合診療」を専門科としております。性別、臓器、年齢、こころとからだの違いを問わず、その人を丸ごと診ることを専門とする領域です。

一例目は米国内科学会日本支部年次総会での「An experience of Cryptococcus informants meningoencephalitis in HIV seronegative patient（非HIV患者におけるクリプトコッカス脳髄膜炎の経験）」

二例目は日本リハビリテーション医学会学術集会での「地方小病院地域包括ケア病棟におけるリハビリ実績のまとめ」と題した発表でした。

地方で医療を行う上で、質の管理というのは極めて大切なことだと常日頃感じながら診療を行っております。 当たり前のことかと思われるかもしれませんが、実はそう簡単なことではありません。 地方で診療を行うということ、とりわけ総合診療を行うということは、都会で専門医療を行うことと対比して、患者さんを丸ごと診るという点では非常に有利な点が多いのですが、一方で簡単に独善的な　診療に陥りやすいという危険と隣合わせの環境に晒されています。地方で独善的な医療をしない、標準的な医療の質を保つということは、そのような危険に晒されていることに常に自覚的になり、世の中の医療の標準や新しい診療指針への目配せを怠らないという姿勢が求められるのです。

学会発表というのは、自分たちの医療がそのような危険から一歩脱するためにはとても大切な活動です。自身の医療を振り返り、文献的に考察し、周囲の専門機関からの評価を受ける。このような努力なしに、安全な医療を提供し、地域住人の健康を守ることは困難であると考えています。

これからも、このような積極的な活動を通じて、自己研鑽に励み、地域のみなさんに安心安全な医療を提供したいと考えています。

ようこそ綾部へ ・韓国グリーン病院から 家庭医3年目専攻医 オ・ビョンフン医師が3日間の研修

右・オ・ビョンフン医師
左 寺本医師(ふくちやま協立診療所所長

韓国グリーン病院家庭医学コース、3年目専攻医が6月1日から3日間の予定で京都協立病院に見学研修に来られました。

研修の目的は高齢化社会に入った日本の老年管理及び介護サービスや家庭医療の全体的なシステム、特に老人病の管理システム、日本の老人病管理の実態と介護サービスを学びたいということ。5月6日から来日し、この1ヶ月間、京都民医連の病院、診療所を見学して非常に勉強になったという感想でした。言葉は、英語と日本語で簡単なコミュニケーションが可能。身振り手振りで会話可能という事前情報でしたが来日してから1ヵ月間しかたっていないにも関わらず、私たちがコミュニケーションで困るという場面はありませんでした。

到着早々、救急車で来院した101歳の患者対応、入院患者急変などの診察を一緒に診てもらい、日韓の医療状況の違いについて意見交換、日韓でのリハビリテーション医療の違いや韓国の家庭医は日本の老年科医のイメージなどが分かりました。

初日の研修を終えて、本院の看護部長宅で歓迎の宴。歓迎会では両国の医療や介護の話以外に 「韓国の徴兵制はなぜ続いているのか？」「子供の姓名の付け方の違い」などなど、大いに盛り上がりました。また、オ医師は、今はソウルの病院で研修をしていますが、3年間済州島の医療に従事することで懲役が免除されたという話もしてくれました。

3日間という短い研修期間ではありましたが京都市内と本院の位置する地方都市の医療が異なることが分かってもらえたのではないかと思います。あらためて、医療は地域によって異なる、医療は文化、を実感した3日間でした。

Enjoy ！ 趣味を生かし、地域交流、地域貢献

門 祐輔

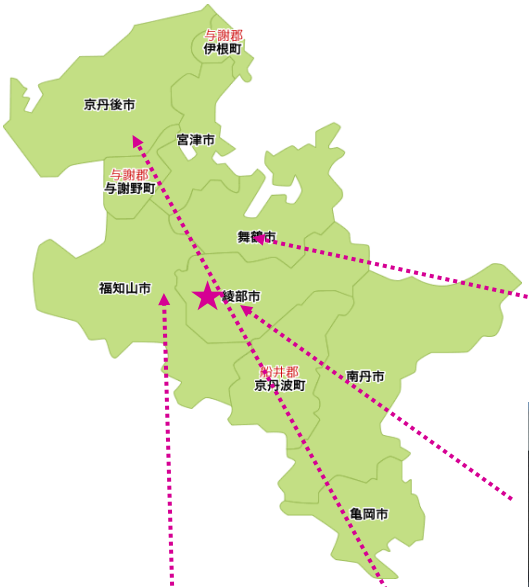
今日は3年目研修医の西澤先生と一緒に、地域交流、地域貢献活動で2016 あやべ仁王門登山レース。
「10kmコースは高低差262m、309段の階段と国宝 二王門をくぐるトレイルコース」とのこと。
上りが中心の最初4kmを26分で通過し、下り中心の6kmもほぼ同タイムで、結局51分55秒でゴール。100kmなら間違いなく歩くような上りのコースを走り続けるのはメチャクチャきつい。急な下りはキロ3分40秒くらいのスピードだったので、いかに高低差が激しいかが分かる。

レース終了後あやべ温泉でランチ

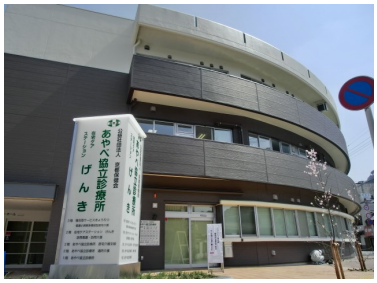
写真は 左から西澤医師・門医師・職員家族

息子とほぼ同い年の研修医に上りで抜かれ下りで抜き返すデッドヒート…でほぼ同着。 約130人中37位だった。
ゴール後に、職員家族のランナーを含め3人で記念写真。参加者は地元中心で、知った顔も結構おり、子どものレースにつきそう親の中には本院職員もチラホラ。
レース後は、あやべ温泉へゆっくりつかったあと舌鼓。
「忙中閑あり」緊迫した状況の中、何をしているんだと思われそうだが…地域交流、地域貢献が最も大切と開き直っている。

医療･介護のネットワーク　北部事業所一覧



京都協立病院



2015年リニューアル
・あやべ協立診療所
・在宅ケアステーションげんき
・複合型きょうりつ併設

・まいづる協立診療所
・ふれあいステーションゆきわ

・ふくちやま協立診療所
・ほっとステーションきぼう

・たんご協立診療所
・訪問看護ステーションゆたかの

● 医師募集

常勤医師　内科、外科、整形外科、診療所所長
非常勤医師　当直、日直、外来等　募集しています。
問い合わせ先･詳細は
京都協立病院（事務局　粟野）
TEL(0773)-42-0440、 E-mail: info@kyoto-kyoritu.org

ホームページもご覧ください。

http://www.kyoto-kyoritsu.org/

公益社団法人京都保健会　京都協立病院
〒623-0045
京都府綾部市高津町三反田1番地
TEL　0773-42-0440